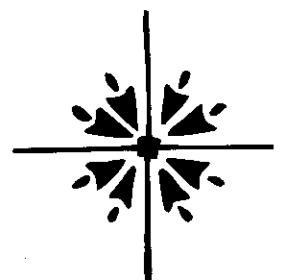


詩と哲学を結ぶために

辻井喬子（さきよこ）
今村純子（いまむらじゅんこ）



辻井喬氏の「芸術創造」と「生の創造」という両輪がつねにともに廻ることによって向かう一点は、過去においても、そして今現在においても、言うなれば、「灼熱の渋谷の街に、一陣のケルトの涼風を吹かせること」であると言えよう。一陣の異文化の風は、二度とは戻つてこない。そしてこの二度と戻つてはこない風を永遠に生きることこそが詩にはかならない。このような辻井氏の稀有名な創造の有り様は、シモーヌ・ヴェイユやレビュリストロースといった、自己に先立つて「構造」や「関係」を捉え、そこに映し出された自己を見出すという有り様と驚くほどの一致を見せる。それゆえ、辻井喬氏の芸術創造と生の創造を、シモーヌ・ヴェイユの思想のコンテクストにおいて捉え直し、その両者の類比と移し替えによって、資本主義といふ明らかに集團に取り込まれる危険性にさらされている社会の直中で、その危険性と紙一重でありながら絶対的に異なる位相において、詩が生きられ感じられる可能性を見出すことができるのでないであろうか。

わたしたちは「なぜ生まれてきたのか」「なぜ生きているのか」、そして「なぜ死んでゆくのか」という、その存在の根源に対する答えをもちえない。だが、もしもこの矛盾であり不条理であるものの理解に一步近づくならば、そこでわたしたちは自由へとひらかれてゆく。シモーヌ・ヴェイユは、この「見えない世界」を、美と詩という「見える世界」によって提示するのがつねである。目的がないのに目的にならぬた心の状態である美の「目的的なき合目的性」について、自己から離れ自己ではない世界と他者に欲望が向かう「善への欲望」について、自分が自己から離れ真に無であるときにはじめて想像力が十全に花開く「真空への注意」について、わたしたちの生の有り様であると同時に造形芸術において具現されている「重力と恩寵」について。

本インタビューでは、辻井氏とインタビュアーとの言葉の往来において、辻井氏の存在としての詩と作品としての詩の両者を通して、「資本主義と詩」が有する様々な局面を少しあき

らかにし、現代という時代にあって、「言葉のなかに閉じ込められた詩」ではなく、「生きられ感じられる詩」の可能性を探究してみたい。

（今村純子）

詩と哲学

今村 このたび『現代詩手帖特集版 シモーヌ・ヴェイユ』を刊行することになりました。その巻頭のインタビューとして辻井さんにお話をうかがいたいと思っております。いま現在、シモーヌ・ヴェイユにどのような可能性を見出せるのか、ということを中心に、広がりをもつたお話を聞きたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

辻井 「現代詩手帖」でシモーヌ・ヴェイユを取り上げるのは、とてもよいことだと思います。詩というのは、哲学なんです。だからそういう視点から見ると、いまの詩はあまりに抒情に身を寄せていて、そこにある哲学が見えてこない。シモーヌ・ヴェイユの著作を読むことで、詩を書く多くのひとが、「ああそうか」と思ってくれるといいですね。

というのは、断るのが下手なのか、私もいくつかの詩の賞の選考をすることになってしまって、年に四、五回、選考会に出ています。そこではだいたい何人かで意見を言うものですから、そうなると、難しい詩は駄目になっちゃう。かと言つて、相田みつをでもなければ、銀色夏生でもない。日本の場合、どこでそういう詩の状況ができるのか、不思議でならないんです。たとえば先日、中国と韓国と日本の詩人が集まる会があつたんですね。そうすると、韓国の詩人と日本の詩人は決定的に違うんですよ。もちろん日本側は高銀さん「一九三三年」という詩人が

中心でしたが、ハングルを自分たちの手に取り戻す運動としての詩作というものが根幹にあるんです。植民地時代にはハングルを教えることは禁止されていましたが、実際は、日常的にハングルで話をしていました。もちろん書いて出版することは認められていましたが、ついぶんひどいことをやつたものだと思うのですが。ですから、高銀さんが詩を書くということは、ハングルを韓国のひとびとが自分の手に取り戻す運動なんです。ところが、そういう詩人の活動ないし詩の運動を、そのときの韓国政府は弾圧するわけです。自分の国と言葉を取り戻そうとする運動をどうして弾圧するのか？ これ 자체がたいへん大きな詩の問題だったわけです。そういう環境をくぐり抜けて韓国のひとたちは詩を書いていますから、「歴史的」ないし「社会的」な関係がかならず詩のなかに潜在しているんですね。

しかし日本の場合は、いろいろな問題があつてもそれには目をつぶつて、「個人の心のなかの問題」あるいは「感性のゆらぎ」とか、そういういたものにだけ焦点をあてて詩が書かれてきていた。そだだとすると、同じ詩人という肩書きで集まつたとしても話がまったく通じない可能性がある。

中国の場合もまた違う問題があつて、さまざまな社会的変動のなかで「人間の言葉をどうやつたら自分のものにできるか」ということを考えてきた。芒克（マック）「一九五〇年」にしても、そういう問題意識があつて、その問題意識の行き着く先として、ときには「反戦デモ」をやつたり、ときには非常に「モダンなもの」を書いたりする。

そういう状況を、われわれ日本の詩人はあんまり自分の問題として考えていないんです。もちろん日本の詩人もすべてがそ

うだというわけではなくて、守中高明さんとか、細見和之さんとか、哲学と一緒にやっているひともいます。ただこのおふたりにしても、問題への関わりかたは一歩ひいたようなところがありますね。

これは詩にかぎらない問題で、小説でもそうです。ピック・セオリーミーのものが日本の詩人や小説家のなかにはなくなりました。「神と現実の問題」とか、「労働」という行為が人間にとつてどんな意味をもつのか」とか、そういうことを根本的に考えてきた詩人には、吉本隆明さん〔一九二四年〕、谷川雁さん〔一九三一年〕などがある。それから谷川俊太郎〔一九三一年〕さんなんてひとはとてもすぐれた詩人なんだけれども、じつにうまくそういう問題意識を自分のなかにもちながら、わかりやすい詩を書いている。それぐらいしか思い浮かびません。

これは日本人の詩を外国语に訳すときの困難とも通じていて、思想的な内容がないと、英語にしてもフランス語にしてもドイツ語にしても論理的な言語ですから、日本の詩はただの叙事詩になってしまいます。それはとても辛いところですね。

芸術と超越

今村 日本の詩には哲学がないということですが、シモーヌ・ヴェイユといふ人は、実は詩人になりたかった人なんですね。ずっと自分の哲学を掘り下げてゆくと、詩にたどり着く。この特集版にも彼女の詩を五篇収録しているのですが、詩と哲学とのあわい、詩と哲学との共演というのは、どうしても不可欠なものになつてくるだらうと思います。

シモーヌ・ヴェイユについて話していくいつもネックになつてます。

そしてこの「純金の預かり物」はとても緻密で硬質なので、きっと誰も受け取つてくれるひとがいないのではないかと危惧しています。

どうしたらシモーヌ・ヴェイユの思想をちゃんと受け取ることができるんだろうと考えていつたとき、私の場合は、彼女の思想を西田幾多郎〔一八七〇～一九四五年〕や鈴木大拙〔一八七〇～一九六六年〕の思想とぶつけてみたりしました。まったく異質なものをぶつけることで、ヴェイユの思想の片鱗が見えるんじやないかと思つたんです。

「日本には近代があつたのか」ということを辻井さんはよくお書きになつていらっしゃいますが、「近代の超克」という視点から見ると、西田とヴェイユが最終的に辿りついた地點はすごく近いと思います。しかし確固たる自我があつてそれが外側から崩された後の「無」「ヴェイユ」と、そもそも自我があいまいなままでそのままダイレクトに到達した「無」〔西田〕はまったく違うと思つております。そのことが、先ほどおつしやつたように「思想がない」ということだけではなく、きわめて暴力的なものとして働く可能性があると思つんです。



辻井喬

これは詩にかぎらない問題で、小説でもそうです。ピック・セオリーミーのものが日本の詩人や小説家のなかにはなくなりました。「神と現実の問題」とか、「労働」という行為が人間にとつてどんな意味をもつのか」とか、そういうことを根本的に考えてきた詩人には、吉本隆明さん〔一九二四年〕、谷川雁さん〔一九三一年〕などがある。それから谷川俊太郎〔一九三一年〕さんなんてひとはとてもすぐれた詩人なんだけれども、じつにうまくそういう問題意識を自分のなかにもちながら、わかりやすい詩を書いている。それぐらいしか思い浮かびません。

これは日本人の詩を外国语に訳すときの困難とも通じていて、思想的な内容がないと、英語にしてもフランス語にしてもドイツ語にしても論理的な言語ですから、日本の詩はただの叙事詩になつてしまふ。それはとても辛いところですね。

芸術と超越

今村 日本の詩には哲学がないということですが、シモーヌ・ヴェイユといふ人は、実は詩人になりたかった人なんですね。ずっと自分の哲学を掘り下げてゆくと、詩にたどり着く。この特集版にも彼女の詩を五篇収録しているのですが、詩と哲学とのあわい、詩と哲学との共演というのは、どうしても不可欠なものになつてくるだらうと思います。

シモーヌ・ヴェイユについて話していくいつもネックになつてます。

そしてこの「純金の預かり物」はとても緻密で硬質なので、きっと誰も受け取つてくれるひとがいないのではないかと危惧しています。

どうしたらシモーヌ・ヴェイユの思想をちゃんと受け取ることができるんだろうと考えていつたとき、私の場合は、彼女の思想を西田幾多郎〔一八七〇～一九四五年〕や鈴木大拙〔一八七〇～一九六六年〕の思想とぶつけてみたりしました。まったく異質なものをぶつけることで、ヴェイユの思想の片鱗が見えるんじやないかと思つたんです。

「日本には近代があつたのか」ということを辻井さんはよくお書きになつていらっしゃいますが、「近代の超克」という視点から見ると、西田とヴェイユが最終的に辿りついた地點はすごく近いと思います。しかし確固たる自我があつてそれが外側から崩された後の「無」「ヴェイユ」と、そもそも自我があいまいなままでそのままダイレクトに到達した「無」〔西田〕はまったく違うと思つております。そのことが、先ほどおつしやつたように「思想がない」ということだけではなく、きわめて暴力的なものとして働く可能性があると思つんです。

これは詩にかぎらない問題で、小説でもそうです。ピック・セオリーミーのものが日本の詩人や小説家のなかにはなくなりました。「神と現実の問題」とか、「労働」という行為が人間にとつてどんな意味をもつのか」とか、そういうことを根本的に考えてきた詩人には、吉本隆明さん〔一九二四年〕、谷川雁さん〔一九三一年〕などがある。それから谷川俊太郎〔一九三一年〕さんなんてひとはとてもすぐれた詩人なんだけれども、じつにうまくそういう問題意識を自分のなかにもちながら、わかりやすい詩を書いている。それぐらいしか思い浮かびません。

これは日本人の詩を外国语に訳すときの困難とも通じていて、思想的な内容がないと、英語にてもフランス語にしてもドイツ語にしても論理的な言語ですから、日本の詩はただの叙事詩になつてしまふ。それはとても辛いところですね。

芸術と超越

今村 日本にはいわゆる超越者というのがいないからね。

今村 でもその一方で、すぐれた詩人や音楽家のひとたちは、ちゃんと、しっかりとシモーヌ・ヴェイユを読んでいるんです。

辻井 超越者のいない芸術作品というのは、本当はないと思うますよ。だからシモーヌ・ヴェイユを読むというのはよくわかれます。

辻井 「神」と言ったとき、多くの日本人は、それを「目に見える神」として捉えてしまう。でもヴェイユが言つているのは「見えない神」なんです。「見えない神」とはどういうもののかというところまで捉えるにはかなり根気が要りますが、「見えない」ということは自分が欲望するものを与えてくれない神なわけです。矛盾のなかに立たせてしまう神であつて、不条理を解決してくれない神です。それを神の「あらわれ」と感じられるかどうかということを、シモーヌ・ヴェイユは追つていたと思います。

辻井さんもヴェイユについて主題的に書かれたことはないと思つのですが、主題的には書かないけれども、でもつねに創作の原点にはなつてはいるという芸術家のひとたちは、結構多いように思います。

辻井 日本の物書きにとって、神という言葉が一種のタブーになつていた時代がありました。その意味では「歎異抄」などには「歎異抄」なりに通じるところがあるという感じがあつて、

かで一層腐つていきますでしょう。

思想がなくとも、言葉がなくとも、それで一生を終える場合にはそれはそのひとの勝手だけれども、それが他者に対する暴力的なものとして働く場合、非常に問題であるう思います。そのことをシモーヌ・ヴェイエは、「ある学生への手紙」「労働の条件」「邦訳：労働と人生についての省察」（労草書房所収）のなかで、アンドレ・ジッド「一八六九—一九五一年」みたいな作家を指して、「感覚だけに生きたひとがいるけれども、それは非常に暴力的なことなんだ」と言っています。

資本主義と詩

辻井　たしかに私は自分のことを考えたときに本当にでたらめで、いい加減で体をなしていらないと思います。それはどういうことかと言いますと、私自身はもちろん資本主義のなかで生きていますが、ただ生きているばかりじゃなくて、むしろその資本主義の推進者、資本主義をその爛熟へと推進する役割を果たしてしまった、という実績があるわけです（笑）。それは認めざるを得ない。それで、爛熟へ向かっていく推進者のひとりになればなるほど、やっぱり詩が生れてくる。詩を救命ブレイブみたいに探し求めている。それって詐欺師もいいところです。いまは資本主義のまつたなから完全に意識のうえでもりタイアできましたから、はじめてそういうふうなことが言えるんです。それまでは悔しいから、「いやいや、ビジネスをやっているから詩が書けるんだ」と言っていた（笑）。日本の読者は心が優しいから、「そういうこともあるんだろうな」と聞きました。

たしかにいろんなことにぶつかればぶつかるほど、資本の動き——資本の動きは人間と関係なく一種の装置として存在しているわけですね——のなかに人が入った場合、影響されているのが見えてくるんですよ。いろんな比喩が使えるんだけれども、ナチスの青年将校がたくさんひとを殺して、フランスを占領して、占拠した邸宅のピアノでモーツアルトを弾く。「やっぱり戦争をやっているとモーツアルトが弾きなくなるんだよね」って。それは「芸術とは何か」っていうこととつながつてくるんです。

芸術は人間の矛盾のなかにだけ花開くものだとぼくは感じています。芸術というのは一方に、美しいもの、美しさで感性に訴えて感動を与えるものがあります。アーティストによっては、空のうえのほうにイメージの世界を構築するわけです。後期ロマン派のひとたちが言つたように、芸術は地上にあってはいけないんだ、と。地上にありえないものだからこそ芸術が価値があるものになる、と。そういう芸術家もいれば、その一方で人間の醜さ、汚さのなかにこそ詩が生まれる、路上にこそ詩がある、という考え方もある。そういうふたつの考え方がありますが、いますごく大きな変わり自に来ているんじゃないかな、と思うことがあります。

それはたとえば、現代詩の世界を見ると、行き詰つているというか、そういうふうに見えるわけです。ただ、今までの詩への向かい方を変えてゆけば、むしろ新しい視野が開けてくる、そういう時期に入ってきたいるんじゃないかなと思います。

歴史の古層を訪ねて

辻井　「日本に近代があったのか」という問題についても、そろが言うと、「近代ってなんですか？」って話になつて、批判を受けるんだろうけれども、「モダン」「モダニズム」と言つても、フランスやドイツ、あるいは日本のモダニズム、アジアのモダニズム、それぞれかなり違うものです。いままで、「日本には近代があつたのか、近代国家というしつらえはあつたけれども、そのなかにいるひとは近代人でもなんでもない」と言われるわけです。

丸山眞男さん「一九一四—一九六年」は、一九四五年八月十五日に戦争が終わつて、新しい憲法ができる、これで大衆は育つんだ、自分の判断で自分の考えを決められる大衆が育つてくれば、日本の社会は地盤がしっかりと形成される、という考えをもつた。ところが十年経つても、自分で判断を下して行動する大衆が生れなかつた。ですから、丸山さんは一種の挫折感をもつて日本の歴史の古層を探ろうとした。そこには意外にもいろんなものが入つていて、人間と直接対話する神みたいな考え方があつたりするわけです。丸山さんはそこまで書いていないんですが、そういうものをあらためて読み直しながら考えてみると、日本には「西洋的ではない近代」があつたと言えるのかもしれません。

ここまでくると、柳田國男「一八七五—一九六二年」とつながつてくるんだけど、柳田は重層性というのを、日本の変化は革命によつては起こらない、何回も何回も塗り替えていくうちにだんだん変わつてくるんだ、その重層性が日本社会の特徴で

ある、と言つた。

結局、丸山さんは最後まで自分が絶望したとはおつしやらなかつた。ぼくは晩年に何回かお会いしましたが、それは辛かつたろうと思つています。でもそうなると、歴史そのものの見かたを変えなくちゃいけない。

フランスの「ミッシェル・」フーコー「一九一六—一九四四年」やなんかから始まる新しい思想の流れも、今までの西洋の史学の方向性は少し間違つていたんじゃないかということを言つわけです。簡単に言つてしまふと、もともと「構造」というものがあつて、その「構造」を発見することが歴史見ることである、と。人間が進化していくという史観を否定します。そういうヨーロッパ社会における今までの知の体験の反省が生れた時期と、丸山さんが日本社会に壁を感じて、あるときは絶望し、あるときは日本の歴史の古層にその可能性を見つけようとした時期とはだいたい同じで、同時代的に動いているという感じがするんです。そしてこの問題は、それ自体が詩の問題だと思います。今村　まさしくそのとおりだと思います。フーコーが『狂気の歴史』を博士論文として提出したとき、「狂気の歴史をよくには詩人の資質が必要です」と「その『頭試問のとき』」言つて、カンギレム「一九〇四—一九五年」が、「あなたにはその資質が備わつていますね」とその試問を締めくくつたというエピソードがありますね。

学際性とは何か

辻井　「学際的」という言葉がさかんに使われた時期があつて、学問の世界の「脱領域化」あるいは「越境」ということが言

われました。でもどうなんだろう、ぼくはちょっと疑問があります。日本の場合にはいろんなものの考え方の流れが、パリコレのファンションみたいにどんどん入ってくるんです。いまは「脱構築」ですよとか「ポストモダン」ですよとか。だから、そういうときにはシモース・ヴェイユみたいなひとが必要なのかもしれない。まったくどうにもならないほど不器用で、ひとつ問題を捉えたら、まわりがどう騒ぐともひたむきにその問題に突っ込んでいくという存在ですね。そういう存在が必要だと私は思うんです。

今村 「学際的である」、あるいは、「他者と出会う」ということは、外側から自身が壊されるということなくして成り立たないということを、ヴェイユは言わんとしていると思います。それが前提となっているはずです。だから極端なだけに構造がものすごくわかりやすいのです。

レビューストロース 「一九〇八～一〇〇九年」とヴェイユを結びつけるひとはあまりいないですが、実のところ、かれらの行動というのは、とてもよく似ているんです。激動の時代の直中でレビューストロースはなによりもます「自分に出会うために」ブラジルに行くわけですよね。つまり、自分に出会うためには、今まで自分が抛り所にしていたものが崩される経験がどうしても必要になってしまいます。

さきほど辻井さんはご自身のことを詐欺師だとおっしゃいました。資本主義の推進者でありながら、そこにいることで詩が生れてくるなんていうのは矛盾しているんじゃないか、と。

ヴェイユは、頭痛が絶頂に達して死ぬんじやないかと思つたときにはじめて詩の言葉が出てくると言つています【カイエ

2】。だからヴェイユの場合は絶望や不幸と詩がセットになっていて、そこで、彼女の象徴的な言葉であると言える「貧困のなかにこそ詩がある」「断章と覺書」「ロンドン論集」とさいこの手紙」というあたりようが見えてくると思います。

辻井 絶望のなかには精神的に極端な貧困もありますよね。正直なところ経営者の立場だった私は精神的には貧困者だったと思います。だからこそ詩を書こうとしたのかもしれない。でもね、「いまさらそんなことを言われても困るよ」とて言われるんです。「私はあなたの極端に貧困な精神の時代にづくり出したバルコとか、そういうもので育つて、週に一度は渋谷のレコード売り場に行つて、前衛音楽を買つたりしていんだですよ」って。「いまさら極端に貧困だったなんて涼しい顔をされても、オレはどうしたらいいんだ?」って叱られたりする。いまそいうひとたちが、だいたい五十年代ぐらいになつていてます。そう言わされたら、「自分はいつたい何をしてきたんだろう?」といふことを考えてしまいます。まあ、いま考へないと時間的にリミットがきてしまふんですが(笑)。

詩をもつ」と

今村 少しづつ中心をずらしみたいと思います。シモース・ヴェイユの思想の核のひとつに「目的なき合目的性」というのがあるのですが、一九八〇年代、九〇年代の西武の文化事業はそれこそ「狂気」と言つてしまつていいだらうと思います。あの頃の西武の活動がなければ、現在の広告もデザインのありようもまったく違つたものになつていただろうと思います。ですから、辻井さんの文化事業は成功しているわけです。

ヴェイユはプラトンの『ティマイオス』を解釈しつつ自分の芸術理論を打ち出しているんですが【『ティマイオス』註解】

「前キリスト教的直観」所収、時計職人だつたら時計を作るという目的があつてそこに向かつて型どおりの時計をつくる。でも芸術家にはその向かうべき目的がない。両者は絶対的に違うものであつて、それは受け取る側も同様で、時計を愛さなくとも時計を使うことはできるけれども、芸術作品を愛することなく、芸術作品を觀照することはできない、と転回してきます。

辻井さんが資本主義社会のなかで文化の推進者となられたとき、そこには何の目的もなかつたのではないかと思うのです。そしてそのことはご自身でわかつてらつしやつた。目的がないけれども、目的になつた心の状態があつて、それをこの時間、空間のなかに置きたいと、置かなければいけない、とそういうお考えでいらっしゃつたのではないかな、と。ですから、あの時代には、本気でやりたいことをやっていらっしゃつたと思うんです。何と申しますか、義務と直観が重なつたその一点に立つていらっしゃつたように思われるのですが、いかがでしようか。

辻井 そう言わるとそういう気がしてくる頗りなさがあるけれど(笑)。あのころは「開放感」ということを考えていたような気がします。「開放感」を少しでも大きくしたい、膨らませたいという、そういう目的はあつたと思います。「開放感」をちょっとでも膨らませるというのは、産業社会のなかではまさに「無目的的」です。でも私の方でそれが目的として価値あるものになつていた。それをつきつめると産業社会とは基本的に矛盾してしまうんですが、こういうものを見せることで、あるいは聞かせることで、人間としての心の自由がちょっととは

膨らむんじやないか、広がるんじやないか、それは自分がやつてもいいことだつて思つていた。

ビジネスというのは、それこそ毎月毎月、貸借対照表なんかを作らなくちゃならない辛氣臭い作業なんだけれども、その目的が多少でもあれば、それが多少辛氣臭くても我慢できるなつて(笑)。自分の感性なり何なりを広げるチャンスがあつたら素晴らしい人生を送れたかも知れないひとが、そのチャンスに恵まれないばかりに一生辛い思いのまま死んでいつたというようなことを、無数に見てきたわけです。

ほくの妹(提邦子さん)なんかは、そういうチャンスに恵まれないばかりに行き詰まつてしまつた。それに対してもあげられなかつたという思いが身近にあつたんです。あつ、でもこれはヴェイユの言つていることとははづれていますよね?

自覚と詩

今村 いいえ、それでいいです。「根をもつ」とではずっとそつちのほうに引っ張つていくわけですから、どんなひとでも根をもつべきだ、と。芸術家だつたら、ただ芸術家であるだけで、それでいいんだ、と。それが「わたし」がたしかに「わたし」であることなんだ、と。だから、「わたしはわたし以外の者にはなれなかつたのである。これは驚くべき事実である」と小林秀雄「一九〇二～八三年」が「様々な意匠」で言うように、「わたし」がたしかに「わたし」であればそれでいい。それで十分倫理的でもあるんだと思います。「わたし」が「わたし」であるというただそれだけで、他者の生をも活き活きさせている、その生きざま、その姿だけで、他者の心を震わせる。

ただそれだけで十分人間的であるのではないかと思います。

私はいま美術大学で美術を学ぶ学生たちに哲学や倫理学を教えているのですが、たとえば彼らは「絵ばかり描いていて果たしていいんだろうか?」と思つたりするわけです。でも、その人が本気でそのことをやつていたら、その存在だけで、その作品の強さだけで、他者の心を震わせることができたとしたら、それはものすごいことで、その作品に接した人の生が動き出るんだつたら、ただただ「絵を描く」というその行為だけで、他の者と手と手をつけないでゆける。つまり、他者と手をつなぎたかつたら、そうしたら、ひたすら自分というのを握つてゆけばいい。そのことをヴェイユは、*Enracinement*「根をもつこと」と言つたのだと思います。それは最初に辻井さんがおっしゃった「歴史的・社会的自^己」につながつていくのではないかと思います。そして、本当の芸術家であるならば、その人は、「社会的・歴史的自^己」でなければいけないわけですよね。

辻井 そういう言われると、とてもよくわかります。その点では、ほんとに思想の言葉というのを日本の詩人や小説家はもつてないんじゃないかと思う。詩人や小説家じやなくともいい、芸術家がいただろかと思うわけです。宮沢賢治〔一八九六～一九三三年〕はもつていたと思います。それから三島由紀夫〔一九二五～七〇年〕も谷崎潤一郎〔一八八六～一九六五年〕ももつていた。けれども、いわゆる自然主義リアリズムの作家はもつていなかつた。ぼくが今までずっと慷慨し続けてるのは、「私小説」という概念です。ああいう概念でたらめを言うから、日本の文学はえらい苦労しちゃつた。ぼくの考えでは「私小説」じゃない小説なんてない。「フローベール〔一八一〇～八〇年〕の

働くの現場にはじめてその視点を導入されたんだと思うのですけれども。でも端的にはそういう風に理解されないですよね。

これはすごく「当たり前」のことですが、この当たり前のことが理解されるのは至難の業です。だって、自分の力が拡大していくならそのほうが自由で幸せなんじゃないの?ってわたしらちは思つてしまふわけですから。だから、そのなかなか理解されえない逆説が、実はこんなふうにごく普通に、当たり前に生きられ感じられているんだよ、ということを示すために、イユは詩的イメージの力に訴えかけるんだと思います。

辻井 ほくには「階級同一性障害」という感覚があるんです。「性同一性障害」というのがあります。経営者は「階級同一性障害」で、これはなんだろ?と思うんです。経営者同士で集まつても、仲間という気がぜんぜんしない(笑)。経営者というのは極端に同一化したがる人か、変わつた人種でないとつとまらないんじゃないかな。

前に話してあまり受けなかつた話だけど、財界のひとが占領軍に抵抗して総辞職しようとしたことがあるんです。アメリカが原理的で非現実的な政策を押し付けてきて、そういうものを押しつけられたら日本の産業経済は無茶苦茶になるという危機感があつたんですね。それで、「オレは経団連会長を辞めよう」とか、「オレは商工会議所の会長を辞めよう」とか、七、八人の経営者が揃つて辞表を出そうとした。そういうことをすれば占領目的に違反するのかつてことになつて、ポツダム政令三二五号違反ということになつて、軍事裁判にかけられる可能性もあつた。辞表を取りまとめて、明後日には出そうというときになつて朝鮮戦争〔一九五〇～五三年〕が起つた。そうしたら、

「ボヴァリー夫人」は「わたし」と言つてゐるから「ボヴァリ夫人」は「私小説」ですか?って聞くと、変な顔はするんだ

けれども、反発は返つてこない。「私小説」というのは、ジャナリズムがつくつた呼び名だと思いますよ。どこで間違つたのかなあ。

最近、中国や韓国といったアジアの文学者たちと文学や詩について議論することが多いんだけど、中国や韓国にももちろん「私小説」という概念はありません。日本だけの特殊な概念なんですね。そのことはこの際はつきりさせておかなければいけないんじゃないかな。「私小説」という概念と対峙することからはじめないといけないんじゃないかな。これは嬉しいことだと思います。そういうひとたちが美しい日本語を書きはじめるとき、私小説作家なんかみんな失業しますよ(笑)。

「他なるもの」との一致

今村 辻井さんが労働組合を立ち上げられたり、女性差別についてすごく敏感でいらっしゃつたりする——自己否定という言いかたをされていますけれども——、労働組合があつたほうが経営者にとつて自由なんだ、と。労働者にとつては自由ですけれども、それに先立つてなによりもまず経営者にとつて自由なんだというのはそれ以前にはなかつた発想だと思うんです。

男性が女性を差別するとして、差別された女性はかわいそう

だけれども、男性にとつては、生きやすい世界がつくられていくのかといつたら、まったくそんなことはない。辻井さんは勞脱落する。世界中で日本の経営者だけがベトナム戦争〔一九六〇～七五年〕に賛成だつた。

だから「階級同一性障害」に直面せざるをえないわけです。ぼくはずいぶん吊るし上げられたりしました。それでいてまだちゃんと生きているんだから、日本の社会のいい加減さというのにはありがたいものです。でも「同一性障害」という意味でのものは、詩人はもともとそういうものだつて思うから、どこの国でもそういうのなかつて自ら慰めることにしてゐるんです。アメリカの詩人にも、アメリカこそ世界の憲兵だというようなスローガンに反発しないというのは考えられないでしよう。

ヴェイユが生きていた時代と、いうのは期間的には非常に短かつたけれども、その短いあいだにここまで考えを追いつめることができたのはすごいなあ。三十四歳で亡くなつたんですよ。

熱い社会と冷たい社会

今村 構造主義者たちが一九六〇年代に言つてゐることとヴェイユが一九四三年に言つてゐることはとても近いんです。でも戦後だつたら簡単に言えますけれども、四三年にヴェイユはちゃんと言つてゐる。「冷たい社会」と「熱い社会」と、どつち

が進んでいる社会かは言えないってレヴィ＝ストロースは六〇年代に言うわけですけれども、ヴェイユは、四〇年代に言つていて、そこがすごいなあと思います。

辻井さんは、鶴岡真弓さん「一九五二年」と「ケルトの風に吹かれて」〔北沢図書出版社、一九九六年〕という対談をされていますが、ケルトが無文字文化だったとすると、ケルトの文化は亡びざるをえないわけですね。それと自由というのは別問題であるように思います。

辻井・ケルトの工芸品の素晴らしさを見れば、文字をもとどういえばいつでももてたと思うんです。でも、文字の怖さを知っているからもたなかつたんじゃないかという仮説をぼくは提出しました。文字の怖さってことからスタートしないと詩はダメな時代なんじゃないかと思います。先ほどもお話ししましたが、朝鮮半島のひとにとつて詩を書くことはハングルを取り戻すところなんです。だから高銀さんが詩集を出すとハングルが戻ってきたって感覚でみんな読むわけです。

日本の場合はどうなんだろうというと、われわれはまだ日本語を失いつつある認識が充分でない気がします。詩人でさえもそうです。敬語がうまく使えないアナウンサーがいるとかそういうレベルの話じゃなくて、日本社会から何かが抜け落ちてきている。いわゆる大和言葉で表現できていたこと、あるいはそれでこそ表現できた意味内容が、日本では共有されなくなつてしまっている。そういう文化の崩壊過程にいる気がします。従属国になるということは、言葉を失うことなんだなつていまでもどきどき思います。これはカタカナ言葉が氾濫するということを超えた問題で、文脈的に日本語が生きてこなくなつているんで

す。

先日もNHKで言つたんだけれども、「非正規労働者」という言葉がぼくには理解できない。労働者は「正規」も「非正規」もなくて、みんな労働するひとなんですよね。「正規」、「非正規」って何を基準に分けるのか。でも向こうは変な顔をして、なんで怒っているんだろう? つてぼくを見るわけ。みんな平気なんですよ。テレビでも平気で「非正規労働者」と言つている。そう言つて便利なのは、「非正規労働者」という概念を使うと男女の賃金格差が隠されるんです。「非正規」の圧倒的多数が女性なんです。ヴェイユは「非正規労働者」なんてまず理解できいでしようね。

今村 シモーヌ・ヴェイユが戦後も生きていたら、辻井喬との対談もあったと思ってるんですけども(笑)。辻井喬の対談相手はやっぱりレヴィ＝ストロースじゃなくてヴェイユだと思うんです。工場のなかに下りていつてこのひとたちに詩をもたせる。この絶望的な状態でどうしたら詩をもつことができるかというのが、彼女が最後まで考え抜いたことです。

東洋／西洋

辻井 言葉がほんとに無茶苦茶だと思うのは、財界やエコノミストのあいだにアジア共同体を作ろうなんて掛け声がある。それはちょっと待つてください、と。みんな経済のことしか見ていないんですね。「FTAで貿易が活発になる」って言う。ほんなんかは、「それを日本が言うつもりなの?」って思うわけです。「日本がそれを言つたらみんなそっぽを向きますよ」って。アジアの場合はその地域、地域で宗教が違つていて、神という

もののその社会での存在の仕方がみんな違うわけです。ヨーロッパ社会だったらカソリックやプロテstantと違う違いはありますけど、キリスト教ということでは同じですよね。だから同じものとして言葉は通じます。そして言葉の通じないヨーロッパ社会以外の地域を「東洋」と言つてゐるわけです。だから「西洋対東洋」という対比の仕方にはぼくはどうしても乗つていけない。

そういう問題を文学の問題として受け止めて悪戦苦闘しているのはトルコの作家のオルハン・パムク「一九五二年」です。トルコのひとには、トルコが「西洋」と「西洋ならざるもの」との境界に位置するという意識があつて、「西洋」からの、といふことは「資本主義」からの影響がトルコの伝統文化を破壊し始めているということに対する抵抗感があるんです。読んでみると、これは日本の作家にはとても無理だな、と。骨格が太いんですね。それよりも、たとえば哲学者の木田元さん「一九二八年」のエッセイを最近読んだんですがとてもいいですね。今村 哲学者の書くものは、今までが悪文すぎました。そして「悪文いいんだ」と言つてしまえるその閉鎖性があるかと思ひます。ヴェイユは、「こんな悪文を書いていて美しい魂をもつてゐるはずがないでしょ」と言つたりするのですが、つまり、言葉が美しくなければ、思想もちゃんとしていらないということになりますね。

私は辻井さんの「いつもと同じ春」「一九八八年、新潮文庫」「二〇〇九年、中公文庫」を読んでとても幸せな気持ちになりました。思想書として読んでもとても面白いし。じつは、「抒情と闘争——辻井喬+堤清一回顧録」〔中央公論新社、二〇〇九年〕

よりも「いつも同じ春」のほうを読んで、辻井喬という人をとても近くに感じたような気がしてます。

辻井 そうねえ。それはありがたいお話を。

想像力のまがいもの

今村 事実よりもフィクションのほうを読んで、辻井喬という人を映し出すということには、もちろん想像力の問題がかかわつていてるわけで。自伝的小説である「いつも同じ春」は、

辻井さんは絶対的に違う、絶対的に異なる他者の視点で書かれていたり、先ほど丸山さんの「言葉の古層」という伝統にずっと沈潜していくで、そこからとつてこられる「水平の想像力」だつたり、「垂直の想像力」だつたりするものが読者の心をものすごく「やわらかい心」にしてくれるよう思います。そして、読者が幸せな気分になる爽快な気分になるというのは、読者自身が、ほんの少し自分自身に近づくことです。でも、このダイナミズムを言葉にするのはとても難しい。だからこそ辻井さんは作品を書かれると思うのですけれども。

ヴェイユが言つてゐる、「労働者に必要なものは美であり、詩である」なんていうのはすごく危険なことでもあって、だつてヒトラー「一八八九—一九四五年」がやろうとしたことはまさに「政治の美学化」なわけです、「詩をもつこと」なんていうのも、つまるところ、「日本文化の伝統を大切にするということ」と「国粹主義」というのが紙一重なわけであつて。このすごく危険な紙一重のものをぐつと「こちら側」にとどめておく言葉の力とはいつたといふことなのかなつていつも考へているんですけども。ボーッとしていたら、あつという間

に「あちら側」にとらわれてしまつ、そのぎりぎりの線上を、どんな人の目の前にもひかれてゆくような詩の可能性というのははたしてあるのかなって考えこんでします。

「三島由紀夫はほとんど理解されなかつた」と辻井さんはおっしゃっていますが、ここにはいろんなことが絡んでいます。自ら思考を停止したほうが楽だし自由であるように思えます。だから「考へない」ということは「イメージしない」といふことでもあると思うんです。イメージつて自分が「無」であつて「真空」であつて「何もない」つていう空間じやないと抱けない。そこら辺のところを、いま詩が読まれない時代であることもからめて、どうしたら強く打ち出せるのかなと思います。

辻井 そうですねえ、難しい問題だ。想像力というのは怖い能力です。ですから、想像力が人間にとつてプラスとして考えられた時代と、想像力をもつことは怖いことだということに気がついて想像力を捨てようとしてきた時代と、想像力についても歴史的な動きのなかで変わつてきてていると思います。

たとえば、「核兵器を使いたい」なんていうのは明らかに想像力を捨てた人間でなければ言えない。しかしその核兵器を開発するところまでは想像力が大きな力になつてゐる。そういう関係ですね。だから人間的な能力のひとつである想像力がマイナスにマイナスに働くようになつたときから、産業社会は終末へ向かつて動き出すんだろう、そして現に動いていると思います。いまは産業社会の末期だと思つています。よく言つんですが、いま産業社会は長いトンネルのなかに入った状態で、そのトンネルを抜けたら「雪国」が広がつてゐるのか、「狼の惑星」

復元作用みたいなものだと思います。これは十分に考えた話ではないんですが、占星術などかそういう占いも含めて、そいつた想像力というのは自然と人間との関わりのなかで作られてくる。子どもの時代に自然のなかで時間を過ごした人間は想像力が圧倒的に豊かになるということが言われますが、これは正しいと思います。マンションの一室でテレビゲームだけやつて育つたら、やっぱり想像力は養われないと思つんだなあ。

二十世紀はテーマパークの時代と言われて、ぼくもそういう話をしてきたんですけども、テーマパークは想像力を囲い込む産業社会の装置としては実によく考えられている。ディズニーランドはロサンゼルスで見たぐらいで、日本のものは見ていないんですけど、やっぱり想像力が外へ逸脱しないように囲われた空間になつてゐるんですね。テーマパークで産業社会が想像力を囲い込むのは、一種の最終的な囲い込みのかたちだろうと思ひます。

つい最近まで日本人も想像力をもつていましたよ。この三十年くらいでしょか、目に見えて想像力が落ちてきた。時間的には三十年くらいと言えるけど、中心を担つてゐるひとの想像力の欠如というのは、その前の子どもの時代から想像力が育たない環境だからといふことが言えるわけで、空の雲が動いていたのを見ていたら、「あんた何しているの、そんな暇があつたら早く宿題をやりなさい、いい学校に入れないわよ」つて(笑)。そういう時代で育つたひとがいま五十、六十歳くらいになりますから、遡つて五十年は見ないとなかなか想像力の復活というのは難しいだろうと思います。

ひとがモノになるといふこと

今村 想像力には欲望が絡んでくると思います。昨年〔二〇〇九年〕の七月に臓器移植法案A案が通つてしましましたが、アメリカなんかですと、救急車が家の傍を通ると、ドナーを待つてゐる子どもの親は、「もしかしたらうちの子は助かるかもしれない」と思うわけです。「もつちよつとドナーがあらわれるからがんばるのよ」と子どもを励ますような状況が生まれてしまひます。

わたしたち人間の欲望というのはとりとめがなく、どんどん肥大化していつてしまひます。欲望と想像力の問題を考えいくのはとても難しいのですが、たとえば、レビュリーストロップが「悲しき熱帯」のなかで、「世界は人間なしに終わるだらう」ということも想像力に訴えることですし、その一方で、他者を殺しても自分が生きようする、「あつ、助かるかもしけれない」と思うのも想像力です。

私は、映画『千と千尋の神隠し』などを用いて説明しようとしたわけですが、たとえば、レビュリーストロップが「悲しき熱帯」のなかで、「世界は人間なしに終わるだらう」ということも想像力に訴えることですし、その一方で、他者を殺しても自分が生きようする、このことをモノという視点で考えますと、辻井さんは高い地位にいらっしゃつて、経営者の立場でいらっしゃる。とすると、モノとまでは言わなくとも、やっぱり上下関係というものがどうしてきててしまふのではないかと思います。人を人とも思わなくなつてしまふ部分が人間の上下関係のなかにはどうし

ののような「異次元の世界」が広がつてゐるのか、それはまったくわからないんです。でもそういう長いトンネルだということだけは間違ひない。そう言うとみんないの顔をしません。こんな状態がまだ続くのかよつて。これは残念だけれどもまだ続きます。人間がいい意味での想像力を回復しないかぎり。アメリカなんてもつとも想像力を失つた国です。

これは余談になりますが、アメリカの社会医療制度は他の国にくらべて最悪なんですよ。日本よりも低い。それはなぜか。単純んですよ。アメリカはヨーロッパの階級社会を嫌つて新大陸に行つたひとが創つた国家ですから、ポジティヴな意味での共同体から成り立つてゐる。だから社会保障制度そのものは必要なかつた。ところが「ブラック」オバマさん〔一九六一年〕はその社会保障制度がないことによつて医療を受けられない階層から出てきたひとですから、これは政治生命にかけても変えなければならない。それで医療保険法の改正を出したわけです。そのときいちばん反対したのは生命保険会社です。つまり、社会医療制度が整つてしまつて保険のマーケットが減るんです。保険会社の広告というのは理想的な優しさでしょ? 日本のテレビのCMでもいちばん多いぐらいです。そういうふうに資本は自分の儲けになれば何でもする。言いかたを変えれば、産業社会から資本が人間の顔を失つてきただシンボルが保険会社だと思います。

想像力というのは何によつて豊かになるのかというのを本当に考えなければいけない時代だと思ひます。想像力が枯渇してきた時には、いわゆる怪しげな宗教がたくさん出てくる。あれは一種の想像力の枯渇をカバーしようという、ちょっとずれた

でもできてしまうではないでしょうか。そうすると、ヴェイユが「イーリアス」あるいは力の詩篇「ギリシアの泉【所収】」なかで述べている、「相手をモノとして扱う」とで自分ノになる」という問題をどう解決したらいいのか? そのモノというのが、たとえば辻井さんが「ディドロの」「ダランベールの夢」をひかれて、「モノも考へておるんだ」、「モノも言葉をもつんだ」つておっしゃるときに、「誘導体」思潮社、「一九七一年、あとがき」、原文では「なぜ石も語っていけないのか?」、「自分ではない」、しかも「人間ではない」モノだってしゃべっているんだ、というようななたちで他者を「じっと見る」、「観照する」ということのうちで、はじめて「わたし」というものが浮き彫りになつてくるし、そうしてはじめて見えてくる社会のありようというのがある気がします。

辻井 ヴェイユの言つているように、ひとをモノとして扱う——マルクス「一八一八～八三年」の『資本論』(一八六七～九四八年)なんかは、モノとして扱うことの成り行きを解説した本ですけれども、ひとをモノとして扱つたとき、そのひともモノになるとですね。それが産業社会の最大の欠陥であり、宿命的な欠陥なんですね。その産業社会の宿命的な欠陥が、自由市場経済というシステムを発明したわけです。自由市場経済は本質的にすごく大きな欠陥をもつていてるシステムです。幸いにして東西冷戦が存在していた時代は自由市場経済の欠陥を可能な限り押さえないと批判者にやられるということがつたので、欠陥が見つかると、独禁法を改正したりして抑えてきた。

しかし東と西の対立がなくなつた現在、自由市場経済の批判

者がグローバルな意味では存在しなくなつたんです。そつする

とたちまち自由市場経済の欠陥が随所にあらわれ出した。たとえばアダム・スミス「一七三一～九〇年」が言つてゐるんですが、自由市場経済は三つの条件が満たされたときにはじめて有能なシステムとして機能する。ひとつは利益衝動ではマネージできぬものを国がマネージする。治安、衛生、上下水道などです。それから軍隊と教育ですね。そういうものを国がきちんとマネージしたときには自由市場経済の欠陥はあらわれない。そしてもうひとつ、競争している者同士が互いに相手のことを慮る精神構造をもつてること。そのときに自由主義市場経済は人間にとつて有益なシステムとして機能する。そういう忠告を最初の時期にすでに与えているんです。いまはそれを完全に忘れてはいますよね。ぼくは「アダム・スミスにもう一度帰れ」と言つてゐる。ひとをモノとして扱うと自分もモノになる。オレはモノだけれど、そのどこが悪いのかつて。

同時に、やっぱり大きな問題はどこの国の政府もコントロールできない〈帝国〉というものがいまや世界を徘徊しているところです。〔マルクス&エンゲルス〕「共産党宣言」(一八四八年)になぞつて言えば、それは「ファンド」に象徴されるものです。「ファンド」はこの国が危ないと思つたら二日間ですべて引き上げてしまふ。引き上げられたことによつてその国の経済はストップしてしまう。タイがそうでしたね。これはタイ政府はもちろんのこと、アメリカ政府でもチエックできない。みんな明日はわが身ですから。それはもう自由自在です。

なんとかしなければいけないというので、ドゥルーズ・ガタリ「ジル・ドウルーズ(一九二五～九五年) & フェリックス・ガタリ(一九三〇～九一年)」とか、ジャック・アタリ「一九四三年

」、エマニュエル・トッド「一九五一年」といつた思想家たちがいるなんことを考へてきた。どれも指摘するところまでは極めて説得力があるだけれども、「じやあいれで進みなさ」と言われても、少しも有効でない。ほんとうの対策はこれから考えなければならないわけですね。

それこそ国際的な協力が必要な分野で、アメリカのエコノミストたちが、「Economists Allied for Arms Reduction (ECAAR)」という、軍事費削減を目的としたエコノミストの連盟をつくつたんです。日本でもそれを作つたうとどうので、ほかも参加しているんですが、アメリカのエコノミストが予測を間違つたのは、東西冷戦がなくなつたら軍事費がそうとう浮くだろう、その浮いた軍事費を教育に回せるのではないかと考えたわけですね。これはエコノミストの社会的な責任だらうつて。それで三十人ぐらいエコノミストが集まつたのかな。そのうち何人かはノーベル賞受賞者です。ところが東西冷戦がなくなつたら逆に軍事費が増えちやつた。だから教育費に回すどころかさらに教育費が圧迫される。なぜ増えたかというと、軍事費を増やすないと産業社会がもたないわけです。軍産共同体がもたない、だから歴史上もつとも愚かな大統領だった「ジョージ・W・ブッシュ(一九四六年)」は公然と軍産共同を進めました。それで、「イラクだとアフガンだと軍隊を出さないとアメリカ経済がもたない」つて話になる。大義名分は世界の警察ですが(笑)。

ですから、理論的に追いつめていくとヴェイユが言つてゐるところに辿り着くんですよ。現実社会に起つてゐることと言語的な思想の形成は結びついてゐる。ヴェイユの場合は、あるオメガ(笑)。

リジナリティが確固としてあつて、それが自分の生きて育つてきただけでなく、それが自分の生き方として育つた社会とつながつてくる。でも日本の哲学者の場合はまず知識があつて、その知識をどう読み込むことで自分のアイデアをそこから見つけ出つかつて話になる。オリジナルが自分の生き立ちのなかには存在していない場合があるから、どうしても言葉の重さがなくなつてくる。哲学者でさえもそうなんだから、そういうなかで詩を書く日本の詩人はそうとうなんもんですね(笑)。がんばつてゐるといふことではあると思うんですけど。

象徴と交換

今村 私は一九八〇年代、九〇年代、年齢的にいうと十代、二十代にずっと杉並区の阿佐ヶ谷というところに住んでいて、人間が成長する過程において、世界とうまく織り合いがつかないなつて思うときに——そこに立ち寄るのか、あるいは購入するのかは別として——「SEIYU・西友」や「無印良品」というのが街を彩る「象徴」してあるわけなんですね。たとえば毎日自転車で通学する際に、否応なく心に刻み込まれてしまふ街の風景としてあるんです。

そこでお聞きしたいのが、人々のいろいろな想起の源泉となつてゐる、西武グループのさまざま「象徴」、そして詩のなかのイメージを醸し出す「象徴」、さらに「交換」という象徴の役割についてです。

ヴェイユは、プラトンの『國家』を註解する過程で「[前キリスト教的直觀]、『貨幣は交換手段としてのみ善である』と言つてゐるんですが、私は辻井さんが西武グループのために「百億の個人資産を投資された」とお聞きしたとき、ギヨツとして

しまつたんですが（笑）、そう、庶民の感覚からするとギヨッとする額です。でもたとえ「百億円」でも、もしもそれが「交換」の過程になれば、ただの紙くすにすぎません。

それをもつと突き詰めていくと、どんなものでも、人間の生ですらも、「動いているもの」「流動的なもの」——それは「漏巻き」だつたりするわけですが——、その動きのなかにしか、わたしたちの生のリアリティはない。人間の生の根本には「交換」がある。「わたしを差し出す」ないし「わたしをあけわな寺」というなかに、パラドクシカルに「わたしはある」。

レビュー・ストロースは、社会というものはそういうふうになつていると言つてくるわけですから、どうした「交換」ということをも含めて、どのようにしてわたしたちは善のほうに向かえるのか、「善への欲望」をもてるのか、というとを、「象徴」の視点からお聞きしたいのですが。

辻井「無印良品」というのは、もともとブランドをつけただけのものでも、「割高く売れるつていうのはおかしい」という発想です。同じ製品をブランドをつけないで「割安く売る」とこそ、ビジネスとしてまつとうと考えたわけです。ところが、何年か経つと「無印」というのがひとつの中華になつている（笑）。フランスには十何店かできたかな。イギリスにも二十何店あります。これは「無印」というオリエンタル・フレーリングに満ちたブランドなんですよ。まいっただつて（笑）。声明みたいなのを流して、お香をたいて、そういうのにバリジヤンなら引きつけられる。いまの社会はそつなんだと思つた。ひとりやふたりの善意で原理を変えるなんてできないんだって。それは既成の表現を使えば、挫折感つことになりますか。

「交換」というのがどこから発生したかといふとね、それこそレヴィ・ストロースじゃないけれども、共同体と共同体の関係で、こちらの共同体で余ったものを隣の共同体にあげる、隣の共同体で余ったものをこちらの共同体にあげるという原始的な社会の関係性のなかで交換という問題が生きていた。それが「貨幣」を生み出すわけですが、われわれはいつでも地域貨幣を作つていいんですよ。それに預金機能などをもたらせなければ問題はないんです。最近、地域貨幣がかなり増えてきてるみたいで、そういうると銀行は要らなくなる。そういうことにいるんなひとが気づきはじめているんですね。

変えようとする条件というのは、行き詰まると自然発生的に出てくるんだという感じがします。堕落した交換というのは、すべてを貨幣価値に変えていこうとする。それは落とし穴でしょうね。貨幣そのものが自己目的化してはいけない。いくらお金を使つてあの世にもつていいけるわけじゃないでしょうって言いかたは意外に有効なんですね。交換にもつと人間的な意味があつたはずで、貨幣に換算することによって堕落をしたというのが、いまの時代のひとつシンボルじゃないかと思います。

今村 これから佳境に入るつてところで、あと何時間でもお話を伺ひたいのですが、残念ながらお約束の二時間が経つてしましました。本当にあつとという間でした。私は辻井さんと同じ高校出身で「都立西高校・府立十中」、これまで辻井さんのお話を聞きする機会は何度もあつたのですが、どうもグリーブや郷愁というのが苦手で、今まで一度もお目にかかる機会にきてしまいました。さきほどのお話のように、「同一性障害」

というのは根本的には誰でももつてているように思います。といいますのも、場所や立場——ひとびとが同一化したがるのは社会的・政治的・文化的に高い立場ですが——それはやっぱり自分自身じゃないので、そこではリアリティの感覚が欠如してしまいます。そんなところでは、「わたし」と他人との本当の関係性は築けない。しかし、そうでありながら、その一方で、たとえばヴェイユがあれほど労働者と手と手を取り合おうとしたが、ニューヨークからフランスに戻りたいと思うときに、やっぱりソルボンヌ時代からの友人であるモーリス・シューマン「一九一一年、一九八八年」に、「言うなれば、社会的・政治的・文化的に偉くなつちやつていて」知人に、「貴、机を並べたあなただつたらわたしの気持ちがわかるでしょう」って手紙を書いて〔モーリス・シューマンへの手紙〕「ロンドン論集」といこの手紙所収、極端な階級同一化のほうに訴えかけるわけです。

生きている以上、わたしたちはどうしてもこの矛盾に墮ちてしまいますが、それもあつという間に。そのことにつねに自覺的でありたいと思います。そして今回のインタビューをお引き受けいただきたのも、まさしくその矛盾の直中からとも言えるのですが、そのいっぽうでその矛盾を超えるなにかがあつたかも思っています。今年の六月に出しました拙著の担当編集者の方

が辻井さんに拙著を送つてくださつていて、そうしたら辻井さんから私宛てに励ましのお手紙をいただきました。その冒頭に「世界的規模での思想喪失の時代に、シモーヌ・ヴェイユの存在はとても重要だと思つております」と書いてください、この特集の担当編集者の方に「辻井さんにインタビューをとりたい」とご相談したところ、彼が『辻井喬全詩集』の担当編集者で、辻井さんとともに懇意でいらっしゃるということで、ひとつ関係の橋をつくることができました。このインタビューは、著者と著者の様々な顔を熟知している編集者との熱い線上に成立立つています。縁というのはなんと不思議なものかと思いますが、しかし、もしかしたら、シモーヌ・ヴェイユが「あちら側」から、こうした縁をメッセージとして授けてくれたのかかもしれないとも思います。

本日は、詩人・作家の辻井喬氏と、その辻井さんの追憶のかの堤清二氏とのあざやかな舞踏を披露してくださつたようを感じております。シモーヌ・ヴェイユをめぐつて、資本主義から詩にいたるまでの辻井さんの貴重なかずかずのお言葉が、多くの読者の方々の心にタンポポの種のように宿つて、さまざまな花を咲かせてくれることを夢見ております。本日は本当にどうぞありがとうございました。